

エゼキエル書20-21章「聖なる民と王の杖」

1A 主の鞭 20:1-44

1B 願いを聞かれない主 1-32

1C エジプトから始まる偶像 1-7

2C 荒野にて 10-17

3C 次の世代 18-26

4C 主の前の忌まわしいこと 27-31

2B 反逆者の選り分け 32-44

1C 神の憤りによる帰還 32-38

2C 主に受け入れられる民 39-44

2A 主の剣 20:45-21:32

1B 焼き尽くされる木々 45-49

2B 腰が砕ける嘆き 1-17

1C 正しい者と悪者への裁き 1-7

2C 退けられる杖 8-17

3B バビロンの占い 18-32

1C 二つの道 18-27

2C アモンへの剣 28-32

本文

エゼキエル書 20 章を開いてください、私たちは、主がユダに対して裁きを行われる預言を終えられる時に近づいています。24 章において、エゼキエルが全てを語り終え、それ以上はユダについては何も口から語るができないようにされます。今日はその前半部分、20 章と 21 章を見ていきます。

1A 主の鞭 20:1-44

1B 願いを聞かれない主 1-32

1C エジプトから始まる偶像 1-7

20:1 第七年の第五の月の十日に、イスラエルの長老たちの幾人かが、主に尋ねるために来て、私の前にすわった。20:2 そのとき、私に次のような主のことばがあった。20:3 「人の子よ。イスラエルの長老たちに語って言え。神である主はこう仰せられる。あなたがたが来たのは、わたしに願いを聞いてもらうためなのか。わたしは生きている、わたしは決してあなたがたの願いを聞き入れない。…神である主の御告げ。…」

時は「第七年」です。第二次捕囚、紀元前 597 年を起点として、第七年目ということです。つまり

紀元前 591 年であり、エルサレムが滅ぼされるまであと 5 年あります。その時に、長老たちの幾人かが主に尋ねに来ましたが、その願いを聞かないと主は言われます。以前も長老たちの幾人かがエゼキエルの前にまで来たけれども、主がその願いを聞き入れなかったことがあります。「14:3 人の子よ。これらの者たちは、自分たちの偶像を心の中に秘め、自分たちを不義に引き込むものを、顔の前に置いている。わたしは、どうして彼らの願いを聞いてやれようか。」心の中に偶像があった、ということです。ヤコブ書に、「4:3 願っても受け入れられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。」とあります。今、この態度で長老たちがエゼキエルの所に来ています。

20:4 あなたは彼らをさばこうとするのか。人の子よ。あなたはさばこうとするのか。彼らの先祖たちの、忌みきらうべきわざを彼らに知らせよ。

主はエゼキエルに、どのようにしてこれら長老たちに対して、神の御心を示すのか、その判断を示すのかを教えられています。これから先祖たちの忌み嫌うべき業を教える、と主は言われます。20 章では、イスラエルの始まりの時からその時に至るまでの、そして将来に至るまでの彼らの偶像との関わりを教えていかれます。それはあたかも、人の人生をずっと見ていくようなものです。残念なことに、その人がいつまでも初めから変わることなく、終わりの時まで変わることがない、状況や環境は変わっても、同じことを繰り返して、やっていることは変わらないではないか、という残念な結果に終わります。イスラエルの歴史も、そのように見えるのですが、最後の最後に主の取り計らいで回復させてくださるという約束があります。そこに至るまでには、主が彼らを懲らしめ、選り分ける取り扱いをされます。そうしたイスラエルの歴史を、偶像やその他の罪との関わりで見えていく章です。

20:5 彼らに言え。神である主はこう仰せられる。わたしがイスラエルを選んだとき、ヤコブの家の子孫に誓い、エジプトの地で彼らにわたしを知らせ、わたしがあなたがたの神、主であると言って彼らに誓った。20:6 その日、彼らをエジプトの地から連れ出し、わたしが彼らのために探り出した乳と蜜の流れる地、どの地よりも美しい地に入れることを、彼らに誓った。20:7 わたしは彼らに言った。『おのおのその目の慕う忌まわしいものを投げ捨てよ。エジプトの偶像で身を汚すな。わたしがあなたがたの神、主である。』と。

イスラエルの民は、エジプトで形成されます。それまでは、七十人の家族でした。ヨセフが初めにエジプトに奴隷として兄たちによって売り渡され、それから彼がエジプトの総理大臣になり、そしてヤコブの家族七十人がエジプトに下りました。エジプトというのは、出エジプト記にあるように、数多くの神々があがめられていて、その筆頭がパロであり、ナイル川でした。そして、「忌まわしいもの」とありますが、そうした偶像礼拝は結局のところ自分たちの欲望を満たす表象でありました。エジプトのカイロ博物館に、パロのミイラがありますが、そのミイラに特徴的だったのが性病の跡だったそうです。パロの中には幼少の王と幼少の王女がいますが、父母が性病で早く死んだためだと

言われています。40歳まで生きた人はごく稀だったそうです。

ですから、主はそうしたものに避けるように、初めに語られたのです。そこで、「わたしが彼らのために探り出した乳と蜜の流れる地、どの地よりも美しい地に入れる」と言われるんですね。エジプトにあるものは魅惑的だけれども、自分たちの入る、相続する地はどの地よりも美しいのだと引っ張っておられます。私たちも、神の国がいかに美しいものであるか、それを知って、今の世の誘惑から避けるべきなんですね。

20:8 それでも、彼らはわたしに逆らい、わたしに聞き従おうともせず、みな、その目の慕う忌まわしいものを投げ捨てようともせず、エジプトの偶像を捨てようとしなかった。だから、わたしは、エジプトの地でわたしの憤りを彼らの上に注ぎ、彼らへのわたしの怒りを全うしようと思った。20:9 しかし、わたしはわたしの名のために、彼らが住んでいる諸国の民の目の前で、わたしの名を汚そうとはしなかった。わたしは諸国の民の目の前で彼らをエジプトの地から連れ出す、と知らせていたからだ。

ここから彼らの偶像礼拝の罪の始まりです。ここから、何度も繰り返される言葉は、「わたしはわたしの名のために、彼らが住んでいる諸国の民の目の前で、わたしの名を汚そうとはしなかった。」ということです。彼らのためではなく、ご自身の名のゆえに彼らを滅ぼさないということです。主が彼らをエジプトから連れ出すと約束されていたのに、もしそうでなければ、主が真実な方ではない、ご自分が語られることは行わないのだ、と神を知らない異邦人たちは思います。それを避けるために、主はご自分の民が減ぶことは避けられたのです。私たちにも、このような神の取り扱いがあることを覚えるべきでしょう。私たちがたとえ不従順でも、主はご自分の名、その名誉にかけて、ご自分の働きを継続されるということです。そのような憐れみの中に私たちは生かされています。

2C 荒野にて 10-17

20:10 こうして、わたしはエジプトの地から彼らを連れ出し、荒野に導き入れ、20:11 わたしのおきてを彼らに与え、それを実行すれば生きることのできるそのわたしの定めを彼らに教えた。20:12 わたしはまた、彼らにわたしの安息日を与えてわたしと彼らとの間のしるしとし、わたしが彼らを聖別する主であることを彼らが知るようにした。

荒野の生活です。ここでイスラエルにとって、その契約の印として安息日が与えられました。「出エジプト 31:16-17 イスラエル人はこの安息を守り、永遠の契約として、代々にわたり、この安息を守らなければならない。これは、永遠に、わたしとイスラエル人との間のしるしである。それは主が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれたからである。」彼らが安息日を守ることによって、主が七日目に休まれたこと、それを示すことになります。このことをもって、イスラエルが他の国々から選り別れた、聖なる民であることを証しました。

20:13 それなのに、イスラエルの家は荒野でわたしに逆らい、わたしのおきてに従って歩まず、それを行なえば生きることのできるそのわたしの定めをもないがしろにし、わたしの安息日をひどく汚した。だから、わたしは、荒野でわたしの憤りを彼らの上に注ぎ、彼らを絶ち滅ぼそうと考えた。20:14 しかし、わたしはわたしの名のために、彼らを連れ出すのを見ていた諸国の民の目の前でわたしの名を汚そうとはしなかった。20:15 だが、わたしは、わたしが与えた、乳と蜜の流れる地、どの地よりも麗しい地に彼らを導き入れないと荒野で彼らに誓った。20:16 それは、彼らがわたしの定めをないがしろにし、わたしのおきてを踏み行なわず、わたしの安息日を汚したからだ。それほど彼らの心は偶像を慕っていた。20:17 それでも、わたしは彼らを惜しんで、滅ぼさず、わたしは荒野で彼らを絶やさなかった。

先ほどと同じです。主がご自分の名のゆえに、滅ぼすことを思い直されています。二つの大きな出来事がここにあります。一つは、金の子牛を拝んだ時。もう一つは、カデシュ・バルネアまで来て、それで彼らが約束の地に入らず、エジプトに戻ろうとした時。主は、どちらの場合でも「この民を滅ぼす」と言われたのですが、モーセは、「それでは、エジプト人が、『この神は、わざわざ荒野で滅ぼすために彼らを連れ出したのだ。』ということになります。あなたは、アブラハム、イサク、ヤコブに約束されたではありませんか。空の星のように子孫を増やしてください。」ということを書いて、執り成しました。それで主が思い直されました。

3C 次の世代 18-26

20:18 わたしは彼らの子どもたちに荒野で言った。『あなたがたの父たちのおきてに従って歩むな。彼らのならわしを守るな。彼らの偶像で身を汚すな。20:19 わたしがあなたがたの神、主である。わたしのおきてに従って歩み、わたしの定めを守り行なえ。20:20 また、わたしの安息日をきよく保て。これをわたしとあなたがたとの間のしるしとし、わたしがあなたがたの神、主であることを知れ。』と。20:21 それなのに、その子どもたちはわたしに逆らい、わたしのおきてに従って歩まず、それを行なえば生きることのできるそのわたしの定めを守り行なわず、わたしの安息日を汚した。だから、わたしは、荒野でわたしの憤りを彼らの上に注ぎ、彼らへのわたしの怒りを全うしようと思った。20:22 しかし、わたしは手を引いて、わたしの名のために、彼らを連れ出すのを見ていた諸国の民の目の前でわたしの名を汚そうとはしなかった。20:23 だが、わたしは、彼らを諸国の民の中に散らし、国々へ追い散らすと荒野で彼らに誓った。20:24 彼らがわたしの定めを行なわず、わたしのおきてをないがしろにし、わたしの安息日を汚し、彼らの心が父たちの偶像を慕ったからだ。

主は荒野において、イスラエルの民を四十年間さまよわせました。その間に当時、20歳以上の男子は死に絶えて、新しい世代になりました。その世代に対して、主は改めて、ご自分の掟を守り行なえと命じられました。ところが、彼らは喉が渇くと再び文句を言って、モーセは岩を二度打ってしまい、主が聖なる方であることを示しませんでした。それで、彼自身は約束の地に入れません。また不平を鳴らした時に、燃える蛇を送られました。けれども、彼らは悔い改めたので、モーセに

青銅の蛇を造らせることによって、見るものは生きるようにしてくださいました。

けれども、主は後に諸国の民の間に散らすと宣言されました。それは、彼らが約束の地に入ってから、はるか先、900年ぐらい後に起こります。

20:25 わたしもまた、良くないおきて、それによつては生きられない定めを、彼らに与えた。20:26 彼らがすべての初子に火の中を通らせたとき、わたしは彼らのささげ物によつて彼らを汚した。それは、わたしが彼らを滅ぼすため、わたしが主であることを彼らが知るためである。

彼らが諸国、すなわちバビロンに散らされることになる決定的な出来事が、これです。自分たちの幼子を一けにえとして捧げることです。ここの「彼らに与えた」と主は言われますが、「明け渡した」と言い直すことができます。そして「初子」とありますが、これは出エジプトのことを意識させているのでしょう。主は「初子はわたしのものである(出エジプト 13:1)」と言われていました。イスラエル人をエジプトの初子の死をもって贖い出されたので、神の所有の民となった彼らは、初子を主にお捧げします。けれども、もちろん動物の犠牲のように火で焼いて捧げるのではなく、代金を支払うとか、他の動物によつて贖うとか、とにかく初子が自分自身のものではなく、主のものであることを示すだけです。しかしここで、彼らは初子をなんと、異教の神に火のいけにえとして捧げました。これによつて、主はエルサレムの住民を滅ぼされることをお決めになったのです。

4C 主の前の忌まわしいこと 27-31

20:27 それゆえ、人の子よ、イスラエルの家に語って言え。神である主はこう仰せられる。あなたがたの先祖は、なお、このようにして、わたしに不信に不信を重ね、わたしを冒瀆した。20:28 わたしが、彼らに与えると誓った地に彼らを連れて行ったとき、彼らは、高い丘や茂った木を見ると、どこでも、いけにえをささげ、主の怒りを引き起こすささげ物をささげ、なだめのかおりを供え、注ぎのぶどう酒を注いだ。20:29 そこで、わたしは彼らに言った。あなたがたが通う高き所は何なのか。今日でもその名をバマと呼ばれているが。20:30 それゆえ、イスラエルの家に言え。神である主はこう仰せられる。あなたがたは父たちの行ないをまねて自分自身を汚し、彼らの忌まわしいものを慕って姦淫を犯している。20:31 しかも、ささげ物を供え、幼子に火の中を通らせ、今日まであらゆる偶像で身を汚している。イスラエルの家よ。わたしはどうして、あなたがたの願いを聞いてやれようか。わたしは生きている、..神である主の御告げ。..わたしは決してあなたがたの願いを聞き入れない。

ここが結論です。なぜ主が彼らの願いを聞かれないのか？主の御心ではないことを願っているからです。自分が不義の中において、その願いをかなえたいと思っているからです。

彼らの初めの歴史の時から、偶像礼拝をずっと行なってきました。主がその度に、彼らに新たな歩みを与えておられます。何度も、主と共に歩む機会を与えておられます。それでも言うこと

を聞きませんでした。これは、私たち人間の肉、そのものを表しているでしょう。「ローマ 8:6-8 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。」人は何も変わりません。ゆえに、キリストが人間の肉と同じ姿になってくださって、肉において十字架で神の処罰を受けてくださいました。

2B 反逆者の選り分け 32-44

そして 32 節から、主の特別な計らいが書いてあります。ここでの計らいによって、イスラエルの民が回復への道を歩みます。

1C 神の憤りによる帰還 32-38

20:32 あなたがたが、『私たちは木や石を拝んでいる異邦の民、国々の諸族のようになろう。』と言って心に思い浮かべていることは決して実現しない。

散らされていった民が、このようなことを考えていました。自分たちはどうせ、偶像礼拝の罪から離れられないから、他の異邦人の民のようになればよいのだ、と思ったのです。これは、主はお許しになりません。ここが神の選びの力であります。イスラエルの民が、どんなに異邦人のようになろうとしても、主がそのようにさせないのです。キリスト者への神の選びにも、似たものがあります。私たち神の御霊を与えているものが、他の神を知らない者のように振る舞おうとしても、惨めになるばかりで、結局、主に立ち戻らなければいけないと思います。

20:33 わたしは生きている、..神である主の御告げ。..わたしは憤りを注ぎ、力強い手と伸ばした腕をもって、必ずあなたがたを治める。20:34 わたしは、力強い手と伸ばした腕、注ぎ出る憤りをもって、あなたがたを国々の民の中から連れ出し、その散らされている国々からあなたがたを集める。

彼らが離散した異邦人の地において、異邦人と変わりなく生きているところから主は憤りと力強い手によって連れ出してくると言われます。主が離散の地から集める時に、他の預言の箇所においては、それは主のところに戻ってくる、立ち返るために集められることが書かれているのですが、ここでは、主の憤りの中で集められる、というのです。この預言は、私たちがなおのこと、終わりの日に生きていると確認する預言であります。1800 年間、ユダヤ人がイスラエルの地から散らされて、そしてその散らされた地で迫害や苦難を受け、その最たるものがホロコーストでありました。そして、ホロコーストがあったので、世界の同情が集まり、戦後直後、1947 年 11 月 29 日に国連で、パレスチナ分割決議案で、ユダヤ人が主権を持つ国が承認されたのです。そして実際に独立したのが、1948 年 5 月 14 日でした。

20:35 わたしはあなたがたを国々の民の荒野に連れて行き、そこで、顔と顔を合わせて、あな

たがたをさばく。20:36 わたしがあなたがたの先祖をエジプトの地の荒野でさばいたように、あなたがたをさばく。・・神である主の御告げ。・・20:37 わたしはまた、あなたがたにむちの下を通らせ、あなたがたと契約を結び、20:38 あなたがたのうちから、わたしにそむく反逆者を、えり分ける。わたしは彼らをその寄留している地から連れ出すが、彼らはイスラエルの地にはいることはできない。このとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。

主が、一度、約束の地に集められて、それから荒野に連れて行かれます。そのことについて、イエス様がオリーブ山において、世の終わりについて弟子たちに教えられた時に、語られたことでした。「マタイ24:15-16 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。」黙示録12章では、これが荒野であることが書かれています。そして、イザヤ書やミカ書を見ると、そこがボツラというところ、ヨルダンのペトラではないかと考えられています。

そこで、彼らは守られますが、それでも荒らす憎むべき者が襲ってきて、多くの者たちが殺されます。その殺されることが、「反逆者を、えり分ける」作業であると言えます。ゼカリヤ書13章には、三分の一が生き残り、彼らが主こそ神であると告白することが書かれています。「13:9 わたしは、その三分の一を火の中に入れ、銀を練るように彼らを練り、金をためすように彼らをためす。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『これはわたしの民。』と言い、彼らは『主は私の神。』と言う。」このように、大患難によってユダヤの民は清められ、主に立ち返るように主は定めておられます。

2C 主に受け入れられる民 39-44

20:39 さあ、イスラエルの家よ。神である主はこう仰せられる。おのおの自分の偶像に行き行って仕えるがよい。後にはきつと、あなたがたはわたしに聞くようになる。あなたがたは二度と自分たちのささげ物や偶像で、わたしの聖なる名を汚さなくなる。

イエス様が再臨されて、御霊が彼らに注がれて、清められた姿であります。偶像のところに行き行って仕えようとしても、御霊の声によって主のほうに聞き、そこに迷い込むことがなくなります。そのことによって、主の聖なる名が汚されることがなくなります。

20:40 わたしの聖なる山、イスラエルの高い山の上で、・・神である主の御告げ。・・その所で、この地にいるイスラエルの全家はみな、わたしに仕えるからだ。その所で、わたしは彼らを喜んで受け入れ、その所で、あなたがたのすべての聖なる物とともに、あなたがたの奉納物と最上のささげ物を求める。20:41 わたしがあなたがたを国々の民の中から連れ出し、その散らされている国々からあなたがたを集めるとき、わたしは、あなたがたをなだめのかおりとして喜んで受け入れる。わたしは、諸国の民が見ている前で、あなたがたのうちに、わたしの聖なることを示す。

彼らが主に仕え、主が喜んで受け入れてくださいます。午前礼拝で学びましたように、主は彼らの願いを受け入れませんでした。今は、主は喜んで受け入れておられます。これが、キリスト者の奉仕の姿でもあります。「ローマ 12:1-2 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

20:42 わたしが、あなたがたの先祖に与えると誓った地、イスラエルの地に、あなたがたをはいらせるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。20:43 その所でああなたがたは、自分の身を汚した自分たちの行ないと、すべてのわざとを思い起こし、自分たちの行なったすべての悪のために、自分自身をいとうようになろう。20:44 わたしが、あなたがたの悪い行ないや、腐敗したわざによってでなく、ただわたしの名のために、あなたがたをあしらうとき、イスラエルの家よ、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。…神である主の御告げ。…」

主が初めに憤りをもって国々から彼らを集める時がありましたが、二度目は彼らがこのように、主こそが彼らの神であることを知る、つまり立ち返るようにして、散らされたところから戻ってきます。これは、イエス様の再臨の時に起こります。「マタイ 24:31 人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」そして、ついに彼らは自分たちの悪い行ないや腐敗した業ではなく、ただ主の名によって神が彼らをあしらわれるようになります。

2A 主の剣 20:45-21:32

そして次の預言に入ります。章は数節先で次になるのですが、実際はここ 45 節から新しい預言に入ります。

1B 焼き尽くされる木々 45-49

20:45 さらに、私に次のような主のことばがあった。20:46 「人の子よ。顔を右のほうに向け、南に向かって語りかけ、ネゲブの野の森に向かって預言し、20:47 ネゲブの森に言え。『主のことばを聞け。神である主はこう仰せられる。見よ。わたしはおまえのうちに火をつける。その火はおまえのうち、すべての緑の木と、すべての枯れ木を焼き尽くす。その燃える炎は消されず、ネゲブから北まですべての地面は焼かれてしまう。20:48 そのとき、すべての者は、主であるわたしが燃やしたことを見るであろう。その火は消されない。』」20:49 そこで、私は叫んだ。「ああ、神、主よ。彼らは私について、『彼はたとえ話をくり返している者ではないか。』と言っています。」

右、南、ネゲブはみな、南の方角を表しています。今、エゼキエルが西の地中海のほうから、イスラエルの地図を見ているような感じになっています。そして、ネゲブから北までそのイスラエル

体に火を付けよ、という命令であります。そしてここで大事なのが、「緑の木」があって、また「枯れ木」があることです。この命令をそのままエゼキエルが語ったのですが、お決まりの「たとえ話」を話しているのではないかと、言われてしまったようです。

2B 腰が砕ける嘆き 1-17

1C 正しい者と悪者への裁き 1-7

21:1 次のような主のことばが私にあった。21:2 「人の子よ。顔をエルサレムに向け、聖所に向かって語りかけよ。イスラエルの地に向かって預言せよ。21:3 イスラエルの地に言え。『主はこう仰せられる。今、わたしはあなたに立ち向かう。わたしは剣をさやから抜き、あなたのうちから、正しい者も悪者も断ち滅ぼす。21:4 わたしがあなたのうちから、正しい者も悪者も断ち滅ぼすために、わたしの剣はさやを離れて、ネゲブから北まですべての者に立ち向かう。21:5 このとき、すべての者は、主であるわたしが剣をさやから抜いたことを知ろう。剣はもう、さやに納められない。』

バビロンが初めに地中海沿いに南下して、それから北に向かってエルサレムを攻めに行きます。そして、その時に、「正しい者も悪者も断ち滅ぼす」とあります。これが、緑の木と枯れ木のことで、どうして正しい者も滅ぼされるのでしょうか？以前、エゼキエル書で、ダニエル、ヨブ、ノアのよき正しい者がいたら、その者たちが救われるという言葉がありました。

ここではおそらく、「正しい者」は悪者たちによって迫害を受けることではないかと思われます。つまり、悪者たちが初めにイスラエルの中にいる正しい者たちを迫害し、殺すのですが、悪者たちはバビロンによって滅ぼされるということではないかと思えます。というのは、イエス様がこの箇所を意識されて、十字架を担いでおられる時に語られたからです。女たちが、嘆き悲しんでイエス様について言っていた時に、「彼らが生木にこのようなことをするのなら、枯れ木には、いったい、何が起こるのでしょうか。(ルカ 23:31)」生木というのは、ご自身を指しています。そして枯れ木というのはユダヤ人の宗教指導者たちのことです。またはユダヤ人たち全般と言ってもよいでしょう。正しい者は悪者の妬みによって、殺されました。そして悪者たちは後に、ローマによって滅ぼされます。このように、とてつもない恐ろしい神の裁きが、ローマによって来るのだということ、ご自分のために泣いている女たちに話されたのです。彼女たちは嘆いているが、本当に嘆かなければいけないのは、彼らのほうなのです。

21:6 人の子よ。嘆け。彼らが見ているところで腰が砕けるほど激しく嘆け。21:7 彼らがあなたに、『なぜあなたは嘆くのか。』と言うなら、そのとき、あなたは言え。『この知らせのためだ。それが来ると、すべての者は心がしなえ、すべての者は氣力を失い、みな意気消沈し、だれのひざも震える。今、それが来る。それは実現する。..神である主の御告げ。..』

腰が砕けるほどの嘆きとは、どのようなものなのでしょうか？想像が尽きませんが、もう立ちあがれないほど砕かれるということだと思います。それだけ、エルサレムの滅びが激しいということです。

2C 退けられる杖 8-17

21:8 ついで、私に次のような主のことばがあった。21:9 「人の子よ。預言して言え。主はこう仰せられると言え。剣、一振りの剣が研がれ、みがかれている。21:10 虐殺のために研がれ、いなずまのようにそれはみがかれた。われわれはそれを喜ぼうか。わたしの子の杖も、すべての木のよように、退けられる。21:11 その剣はみがかれて手に握られ、それは、研がれて、みがかれ、殺す者の手に渡される。21:12 叫べ。泣きわめけ。人の子よ。それはわたしの民の上に下り、イスラエルのすべての君主たちの上に下るからだ。剣への恐れがわたしの民に起こる。それゆえ、あなたはももを打って嘆け。21:13 ためされるとき、杖まで退けられたなら、いったいどうなることだろう。…神である主の御告げ。…

剣はバビロンの剣を表していますが、ここで、「わたしの子の杖」とあります。これは、王権のことです。ダビデの座の杖がこれで徹底的に取り上げられてしまう、ということでした。バビロンの行なうことは、根こそぎユダの国というもの、エルサレムの都というものを取り除いてしまうほどの徹底ぶりなのです。杖が退けられたら、ということをも嘆いています。国が死んでしまったらどうなるのか、悲惨であります。今のシリアを見れば、国から杖が取られたらあのようにになってしまう、ということです。

21:14 人の子よ。預言して手を打ち鳴らせ。剣を二倍にし、三倍にして、人を刺し殺す剣とし、大いに人を刺し殺す剣として、彼らを取り囲め。21:15 彼らの心が震えおののくように、彼らのすべての門に、つまずきをふやせ。ああ、わたしは剣の先をいなずまのようにして、虐殺のためにみがきかける。21:16 あなたの顔の向くところ、右に向け、左に向けて切りまくれ。21:17 わたしもまた、手を打ち鳴らし、わたしの憤りを静めよう。主であるわたしが語るのだ。」

剣を二倍、三倍にすると、バビロン捕囚の回数です。紀元前 605 年が第一次、紀元前 597 年が第二次、そして紀元前 586 年が第三次で、これでエルサレムは破壊されます。そして、エゼキエルは手を打ち鳴らして剣の預言を行ないましたが、主ご自身も手を打ち鳴らして、この裁きを全うされます。これですべての神の怒りが満たされこれ以上は行なわない、という意味です。

3B バビロンの占い 18-32

次に二つの道についての、興味深い預言があります。

1C 二つの道 18-27

21:18 ついで、私に次のような主のことばがあった。21:19 「人の子よ。バビロンの王の剣が来るために、二つの道にしるしをつけ、二つとも一つの国から出るようにせよ。町に向かう道の始まりに一つの道しるべを刻みつけておけ。21:20 剣がアモン人のラバカ、ユダ、すなわち、城壁のあるエルサレムに行けるように道にしるしをつけておけ。21:21 バビロンの王は、道の分かれ目、二つの道の辻に立って占いをしよう。彼は矢を振り混ぜて、テラフィムに伺いを立て、肝を調べる。

21:22 彼の右の手にエルサレムへの占いが当たり、彼は城壁くずしを配置し、虐殺を命じて口を開き、叫び声をあげて、城壁くずしを門に向かわせ、塹壕を掘り、壘を築く。

バビロンがユーフラテス河畔地域から南下して、パレスチナ地方にある国々を攻めることを決めました。三つの国がありました。一つはツロです。もう一つはアモンで、そしてもう一つがユダです。リブラまで来て、そこでどの国をまず攻めるかを考えなければいけません。ツロについては、後にエゼキエル書にバビロンによる破壊が預言されていますが、バビロンは、ツロは強いと見て後回しにしました。そしてさらに南下して、今度はアモンの首都ラバカ、あるいはユダの首都エルサレムか、どちらにするか決めなければいけません。

そこで彼らは占いをしたのです。彼らは慣わしで、動物の肝を取り出してそれで彼らの神の意思を伺うという、非常に迷信的な方法を使いましたが、神はこの迷信をも用いて、ご自分の意図を果たされます。まずエルサレムを包囲して、破壊することを決めました。

21:23 彼らは、何回となく誓われても、その占いはうそだと思う。だが、彼は彼らを捕えて、彼らの不義を思い出させる。21:24 それゆえ、神である主はこう仰せられる。あなたがたのそむきの罪があばかれるとき、彼が、あなたがたの不義を思い出させて、あなたがたのすべてのわざに罪が表われるようにするため、また、あなたがたが思い出すため、あなたがたは彼らの手に捕えられる。21:25 悪に汚れたイスラエルの君主よ。あなたの日、最後の刑罰の時が来た。21:26 神である主はこう仰せられる。かぶり物は脱がされ、冠は取り去られる。すべてがすっかり変わり、低い者は高くされ、高い者は低くされる。

エルサレムの人々は、自分たちが異教の慣わしをたくさん受け入れているにも関わらず、バビロンの占いを見下していました。そんな肝調べなんか当てにならない、と。けれども、主はこれをも用いて、彼らに迫られたのです。そしてそんなことで彼らが捕えられることで、彼らがいかに不義を行っていたかを暴かれます。そして、ここで大事な言葉は「冠」です。ゼデキヤから冠が取られます。こうやってダビデの杖、ダビデの冠が取られてしまいました。

21:27 廃墟だ。廃墟だ。わたしはこの国を廃墟にする。このようなことは、わたしが授ける権威を持つ者が来るまでは、かつてなかったことだ。

ここで、メシヤの預言がさりげなく行なわれています。「わたしが授ける権威を持つ者」であります。ゼデキヤはいなくなります。そしてダビデの座が途切れたかのように見えますが、ナザレから出たイエス様の方があります。先に、「低い者は高くされ」とありますが、まさにイエス様のへりくだったお姿の中にこそ、高くされる道があります。

2C アモンへの剣 28-32

21:28 人の子よ。預言して言え。神である主はアモン人と、彼らのそしりについてこう仰せられると言え。剣、一振りの剣が、虐殺のために抜き放たれた。いなずまのようにして、絶ち滅ぼすためにとぎすまされた。21:29 彼らがあなたにむなしい幻を見せ、あなたにまやかしの占いをするとき、その剣は汚れた悪者どもの首に当てられ、彼らの日、最後の刑罰の時が来る。21:30 剣は、さやに納められる。あなたの造られた所、あなたの出身地で、わたしはあなたをさばく。21:31 わたしはあなたの上にわたしの憤りを注ぎ、激しい怒りの火を吹きつけ、滅ぼすことに巧みな残忍な者たちの手に、あなたを渡す。21:32 あなたは火のたきぎとなり、あなたの血はその国の中で流され、もう思い出されることはない。主であるわたしがこう語ったからだ。」

バビロンが占いをして、攻撃を守られたアモンに対して、主が預言を行なわれています。それは、「彼らのそしり」についてだと言われます。アモンは実はイスラエルの敵でした。バビロンに反逆することで、彼らはエルサレムと同盟を結びましたが、実際にバビロンがエルサレムを攻めた時に彼らは喜んだのです。そのことは、後でエゼキエル 25 章に詳しく出ています。神は、イスラエルを呪う者を呪う、と言われました(創世記 12:2 参照)。けれどもイスラエルでなくても、すべての人が不幸な目に遭う時にそれを喜ぶことを、神は深刻に受け止められます。たとえそれが自分の敵であっても、もしその人が倒れたら、私たちは悲しむべきなのです。箴言にこういう御言葉があります。「あなたの敵が倒れるとき、喜んではいけません。彼がつかまずととき、あなたは心から楽しんではいけません。主がそれを見て、御心を痛め、彼への怒りをやめられるといけません。(箴言 24:17-18)」

アモン人は今、地球上から存在しなくなっています。もう思い出されることはなくなりました。けれども 24 節には、エルサレムのそむきの罪が思い出されることが書いてあります。ユダヤ人は、自分たちの不義を思い出しました。またこれからも思い出します。けれどもアモン人は、その存在そのものがなくなり、思い出されなくなります。どちらが良いでしょうか？もちろん罪が明らかにされること、暴かれることは辛いことです。懲らしめられることは悲しいことです。けれども実はこれは神の憐れみの一つなのです。神の所有の民になった者たちは、その罪は暴かれますが、存在そのものを忘れられることはないのです。けれども契約の中に入っていない者たちは、存在そのものが忘れられる、つまり遺棄されるということです。